

『經濟學教科書』(第2版) 第3篇の二、三の問題點

竹 浪 祥 一 郎

ソ同盟科學院經濟學研究所「經濟學教科書」増補改訂版(второе, дополненное издание)は、初版と對比してみると、多くの興味ある問題點をふくんでいる。第1篇「資本主義以前の生産方法」と第2篇「資本主義生産方法」についてはべつの機會にのべたし¹⁾、また増補改訂表が出版されているので、ここでは第3篇「社會主義生産方法」の増補改訂についてのべることにしたい。

よく言われるように、「經濟學教科書」は廣義の經濟學のはじめての體系的敘述である。したがって、それはマルクス主義經濟學の發展の歴史の上で特筆すべき成果ではあるが、同時に、けっして完成された、あるいはまったく疑問の餘地のないものでないことは當然である。だからこそ本書の著者集團は、「初版まえがき」でも、「第2版まえがき」でも、教科書を改善するための仕事をつづける、とのべているわけである。

そのことは第3篇「社會主義生産方法」についてはとくにあてはまる。そのため、第2版では、きわめて多くの箇所が書きかえられ、あるいは増補されている。

羅列的にすぎるが、第3篇について第2版で大きく修正されるか、新しく増補になった節(邦譯でゴチのみだしのついているもの)をあげてみると、つぎのとおりである。(第12章が2章に分れたためそれ以降の章は1章ずつ繰下げになっているが、ここでは舊版の章別による)。

第23章「社會主義的工業化」では、「工業化の社會主義的方法。社會主義的工業化のための資金のみなもと」のつぎに、「基本建設。新しい技術の習得とカードルの問題」が入る。

第24章「農業の集團化」では、「ソ同盟は小農經營の國から世界でもっとも大規模な機械化農業の國になった」が「ソ同盟は小農經營の國から世界でもっとも大規模で高度に機械化された農業の國になった」と改訂。

第28章「社會主義の基本的經濟法則」では、「社會主義の基本的經濟法則の本質的特徴」のつぎに、「社會主

義の基本的經濟法則と社會主義生産の發展」が入る。

第30章「社會主義のもとでの社會的労働」では、「社會主義のもとでの労働の性格。物質的關心の原則」はたんに「社會主義のもとでの労働の性格」となっているが、内容には根本的變化はない。また最後に「労働生産性増大のみなもとと豫備」という興味ある新しい節が入る。

第33章「經濟計算制と採算制。原價と價格」では、はじめの「節約方式」のみだしがなくなり、内容はかなり書きかえられて、つぎの「經濟計算制と企業の採算制」の節に組み入れられている。

第34章「社會主義の農業制度」では、「コルホーズの共同經營。コルホーズの生産手段。作業日」が「コルホーズの共同經營。コルホーズ生産の計畫化」と「コルホーズにおける労働組織の社會主義的形態。作業日」の二つの節に改訂。

第35章「社會主義のもとでの商品取引」が「社會主義のもとでの商業」と改訂。

第39章「社會主義から共產主義への漸次的移行」では、「共產主義社會の二つの段階」のつぎに「ソ同盟の基本的經濟的任務」が入る。

第41章「中華人民共和國の經濟制度」では、「中華人民共和國における生産手段の所有形態と社會の階級構成」が「過渡期の中華人民共和國における經濟制度と階級」と改訂。

このほか、みだしはまったく變っていないのに、内容が大幅に書きかえられている章や節もいくつもある。第26章「社會主義の物質的・生産的土臺」、第33章「經濟計算制と採算制。原價と價格」の數節、第40章「ヨーロッパ人民民主主義諸國の經濟制度」(ことに「人民民主主義革命の性格」の節)その他である。

以下では、第26章と第40章の1部をとりあげ、やや立ちいってみることにする。

2

第26章「社會主義の物質的・生産的土臺」について注目されるのは、社會主義經濟とソヴェト經濟との關係の問題、および社會主義のもとでの生産と技術の現在の發展水準を客觀的により正しく評價するという問題である。

1) 『『經濟學教科書』新版の要點について』『經濟評論』1956年4月號

社会主義経済とソヴェト経済とが同じ概念でないことはいままでもない。ソヴェト経済は社会主義経済ではあるが、ロシアに生まれた社会主義経済であり、いろいろの特殊性をもっている。ことに世界で最初に生まれた社会主義経済であるということからくる特殊性をもっている。このことをいかに考慮に入れて社会主義経済学をつくりあげるかは、たんにこの章の問題ではなくむしろ全巻の問題である。

この点で新版は舊版にくらべてかなりの進歩のあとがみられる。一般的命題が「ソ同盟では……」と叙述されていたところは、書きかえられるか、削除された。たとえば、この章の冒頭「二つの偉大な改造、すなわち國の社会主義的工業化と農業の集團化との結果、ソ同盟には社会主義の物質的・生産的土臺がつくりだされた」(邦譯 650 ページ)は削除、「ソ同盟で確立された社会主義制度」(650 ページあとから 3 行目)は「社会主義のもとでは」と改訂、「ソ同盟では、生産の集積がたかまるのにもなって、工業企業が専門化していく」(655 ページ 4 行目)は削除となっている。他方、「社会主義生産の配置」について、まえには「社会主義のもとでは、生産配置の基礎には、つぎの原則がある」(666 ページあとから 4 行目)としてソ同盟のばあいにとられた原則とその実行による結果がのべられているが、新版では、上記の一文が「社会主義生産の配置で、ソヴェト國家は、社会主義経済の合法則性によって条件づけられるつぎの原則から出發している」と改訂されている。

しかしこの問題では、ソ同盟、さらに人民民主主義諸國の實踐の概括にもとづいて、まだまだ改善の餘地があるのではなからうか。

つぎに、社会主義のもとでの生産と技術の現在の發展水準にたいする評價の問題である。それについては、本年 2 月のソ同盟共産黨第 20 回大會でフルシチョフ報告、ブルガーニン報告などでくりかえしうぬぼれや自己満足をいましめたが、「教科書」第 2 版では、初版の行きすぎた點を、必要と思われる以上に削除ないし書きかえている。「社会主義生産は、世界で、もっとも大規模で、もっとも集積された生産である」(650 ページ終から 3 行目)の「世界で」は削除、「社会主義生産は、世界でもっとも機械化された生産である」(651 ページ 1 行目)は「社会主義は、資本主義に固有な、機械技術を使用するうえでの矛盾と制限をまぬがれている」と改訂、「社会主義経済では、資本主義獨占體が利己的な目的でやるように、技術的進歩をわざとおくらせるようなことは、ありえない」(651 ページ 9~10 行目)、「社会主義のもとでの技術は、資本主義のばあいとはちがって、ふるい技術

にさまたげられて發展をはばまれることがない。ソヴェト工業や農業では、現代の科學と技術とがもっている最新のもの、もっとも完全なものが現實にもちいられている。ソ同盟の國民経済は、もっとも新しい生産技術装置をもっている」(651 ページ終から 3 行目以下)、「社会主義は、工業の技術水準を、これまでにないほどの高さにひきあげた。生産技術という見地、工業生産が新しい技術を十分にそなえているという見地からすれば、ソ同盟の工業は、世界で第 1 位をしめている」(653 ページ 4~6 行目)はいずれも削除となっている。

おなじくまた、「ソ同盟の社会主義農業は、社会的所有をもとにしていとなまれていて、世界でもっとも大規模な、もっとも機械化された農業である」(657 ページ 9~10 行目)は「……社会的所有をもとにしており、世界でもっとも大規模で、高度に機械化された農業である」と改訂、「ソ同盟の工業では、生産の機械化は、資本主義のもとではかつてなかったほどの水準にたっした」(661 ページ 7 行目)は「……生産の機械化は、高度な水準にたっした」と改訂されている。

同時に、ソヴェト経済に現在みられる缺陷が各所で指摘されている、たとえば、「社会主義のもとでの技術的進歩の道」の節の約 20 行にわたる長文の増補(660 ページ終から 3 行目と 2 行目の間に入る)のなかで、「技術的進歩の重要な要因は、外國の科學と技術の成果を全力をあげて利用することである。一連のばあいに、わが國の企業でつくりだされている設備は、外國で製作されている優秀な型のものよりもおくらせている。社会主義體制のすぐれている點は、技術的進歩をはやめ、個々の生産部面にみられる立ちおくれを取りもどし、短期間に資本主義世界の科學と技術の成果を追いこすための可能性をつくりだしている」とのべられている。また生産配置の問題でもつぎの増補がある(669 ページ終から 2 行目のまえに入る)——「達成された成果にもかかわらず、社会主義生産の配置には、まだ大きな缺陷がある。たとえば、これまでは、地方原料や燃料の確保を考慮することなしに、古い工業地區に新しい企業が建設されることがめづらしくない。それとともに、國の東部、とくにシベリア、極東、中央アジア、カザフスタンなど、十分な原料資源と燃料資源のあるところでの工業建設の發展に重大な立ちおくれがある。

これらの缺陷を取りのぞき、生産配置を改善することは、社会主義経済をさらにさかえさせる重要な要因の一つである」

以上のほか、第 26 章の増補改訂で内容からいって重要と思われるのは、「社会主義のもとで技術を進歩させ

る基本線」(660 ページ)である。舊版でこのような基本線としてあげられているのは、機械化および自動化、電化、化学的方法の利用(化学化)の三つであるが、新版では生産用具と工学過程の改善・機械化および自動化、電化、化学化、原子力の平和的利用の五つをあげ、それぞれ説明を補足している。

このように、第26章にみられる増補改訂は、ソ同盟共産黨大會で指摘された、資本主義生産の増大および資本主義のもとでの技術の發達の可能性など、第2篇の増補改訂と同じ線に沿ったものであることがわかる。そして、なおいろいろと改善すべき点があるにしても、これらの増補改訂は、うたがいもなく進歩とみなすことができる。

3

では、第40章「ヨーロッパ人民民主主義諸國の經濟制度」のうち「人民民主主義革命の性格」の節を検討しよう。

まず民族戦線について、初版では「ファシズムとたたかう過程で民族戦線がつくられた。そのなかには、労働者階級や農民とならんで、中小の都市ブルジョアジーやすべての反ファシズム勢力もはいった」(963 ページ終から5~3行目)となっていたが、第2版ではつぎのように改訂されている——「中部ヨーロッパと東南ヨーロッパの國々には、ファシズムとたたかう過程で、すべての反ファシスト勢力を結集した民族戦線がつくられた。そのなかには、労働者階級や農民とならんで、都市の小ブルジョアジーと一部の中ブルジョアジーも入った」。この改訂はたんなる字句の書きかえのようにみえるが、民族戦線の内容をいっそう的確に表現したものと見える。同じようなところだが、このすこしあと、「労働者階級の指導のもとに、労働者階級と農民との同盟を基礎とする人民民主主義権力がつくりだされた」(963 ページ終から3~2行目)のなかで「労働者階級の指導のもとに」一句が削除された。東ヨーロッパのいくつかの國々(ルーマニア、ハンガリー)では、労働者階級の指導権が革命のはじめからうちたてられたとは言えないであろう。

第2版の改訂で重要なのは、人民民主主義革命の第1段階の特徴づけと第2段階への移行がより正確に、そしてより詳細にのべられていることである。人民民主主義革命を2の段階に分け、第1段階=ブルジョア民主主義革命、第2段階=社會主義革命とすることは基本的には正しいが、このさい、第1段階の革命の内容を深く掘りさげ、とくにその第2段階への移行の問題と関連させることをしないと、二つの段階は切りはなされ、人民民主主義革命は全體的な二つの革命過程として取扱われない

ことになる。その意味で A・И・ソボレフの人民民主主義革命論²⁾は幾多のすぐれた点をもっていた。そして「教科書」初版は、まさにこの点で不十分な点をふくんでいたと考えられる。第2版の増補改訂はこの点についておこなわれた。

第2版では「人民民主主義革命は、その段階で、ブルジョア民主主義革命の任務を解決した」(964 ページ2行目)が削除され、「人民民主主義革命は第1に反帝國主義革命であった。というのは、この革命は、奴隷にされていた(中部ヨーロッパと東南ヨーロッパとの)人民を帝國主義のくびきから解放し、彼らに民族的獨立をあたえたからである。人民民主主義革命は、第2に、反封建革命であった。というのは、この革命は、經濟と政治における(半)封建的=農奴制的遺物(關係)を一掃したからである」。(括弧内は削除した箇所、横線は増補分)となった。それにつづいて改行して新しくつぎのように書きくわえられている——

「反帝反封建革命は、資本主義の全般的危機の第2段階の歴史的情勢に特徴的な、新しい型のブルジョア民主主義革命である。この革命は、資本主義の打倒とプロレタリアートの獨裁の樹立をその直接の任務とするものではなく、ブルジョア民主主義革命のうちに入るものであるが、その内容からいって、普通のブルジョア民主主義革命よりも廣く、また深い。なぜなら、第1に、あらゆる反帝反封建革命は、その鋒先を帝國主義的壓制にむけており、帝國主義世界體制の弱化をもたらし、その支柱をゆるがすからである。第2に、反帝反封建革命の勝利は、この革命が社會主義革命へ成長轉化するためにもっとも有利な条件をつくりだすからである。

労働者階級の指導する反帝反封建革命の勝利は、プロレタリアートと農民との革命的民主主義的獨裁の樹立を意味する。この獨裁は、革命をまえへおしすすめ、その第2段階——社會主義革命への直接の移行を実現する。このようにして、反帝反封建革命と社會主義革命とは、一つの鎖の環、單一の革命過程の二つの段階である。

そのさい、これらの任務の大きさ、徹底さ、解決の方法は、おのおのの國の歴史的發展と、できあがった具體的情勢にかかっている。

すべての人民民主主義諸國では、社會制度と國家制度の廣範な民主化がおこなわれた。君主制があったところではそれは廢止された。大多數の國でもっとも大きな意

2) A. I. Sobolev, *People's Democracy, A New Form of Political Organization of Society*, Moscow, 1954.

義をもっていたのは、革命的土改革であった。」このあとが「地主の土地は……」(964 ページ 6 行目)となる(「反封建的な土地革命がすすめられるなかで」は削除)。

さらに、第2段階への移行についてふれた箇所と国有化にかんする箇所の1部(965 ページ終から8~2行)がつぎのように改訂された——

「人民民主主義革命は、反封建的任務を實現しながら、その第2段階にますますうつついき、社會主義革命に成長轉化した。革命の第1段階の主要内容は一般民主主義性格の變革であったが、それにもかかわらず、プロレタリアートと農民との革命的民主主義的獨裁の指導的勢力であった労働者階級は、これらの變革だけにとどまることができず、革命の第2段階への移行を準備した一連の措置を實行した。これらの措置に入るものとしてはつぎのものがある。生産にたいする労働者管理の實施、戦犯と占領者に協力した資本家、および彼らと密接にむすびついていた獨占ブルジョアジーの財産の沒收——この結果ブルジョアジーの經濟的地位はよわまり、大工業の1部は人民國家の手にうつった——もっとも重要な商品の取引にたいする國家獨占と外國貿易にたいする國家統制の實施、その他いくつかの措置。」(これにつづいて、965 ページ終から2行目「革命がすすむなかで……」となる)

このあと、新版では敘述の順序が變り、966 ページ 5~7 行目がつづき、そのあとが同ページ終から3行目「ブルジョア民主主義革命が成長して社會主義革命になるにつれて……」(この一句は「一般民主主義的任務の解決から社會主義革命の任務に移行するにつれて」と改訂)につづく。

ところで、まえとの関連で重要なのは、この節の最後、すなわち967 ページ終から3行目のまえに入る増補分である。

「このように、性格からいってブルジョア民主主義的な革命から社會主義革命への成長轉化の過程、人民民主主義の一つの段階から他の段階への、プロレタリアートと農民との革命的民主主義的獨裁からプロレタリアート

の獨裁の機能をはたす人民民主主義への、漸次的移行の過程がおこなわれた。

民主主義的變革の過程でプロレタリアートの主導権と共産黨の指導的役割とをかためることは、社會主義革命とプロレタリアートの獨裁への移行の決定的前提であった。それはまたこの移行の性格を決定した。プロレタリアートの獨裁の樹立は、1回かぎりの行爲としてではなく、現にある權力の打倒によってではなく、プロレタリアートの地位をしだいに強化し、彼らが廣範な勤勞大衆を自分の側に獲得することによって、ブルジョアジーの經濟的支配の掃をめぐす一連の措置を實行することによっておこなわれた。これらの措置のなかでも決定的意義をもっていたのは、資本主義大企業および銀行の国有化であった。」そしてこのあとに、さきほど除外した966 ページ 1~4 行目と 8~12 行目がくる。

以上、第40章のうち「人民民主主義革命の性格」の節の増補改訂の概要をのべたが、この第2版の内容は大體において國際的な通説といてよく、さきにあげたソボレフの著書と相通するものである。なお、この革命の第1段階を人民民主主義型の革命、第2段階を社會主義型の革命と呼ぶこともある³⁾。このばあいも内容に變化はないが、ここでは、革命がブルジョア民主主義革命としてはじまったというような一般的規定ではなく、特殊な型の民主主義革命であることが強調されているのである。

しかし、「教科書」では、ヨーロッパ人民民主主義諸國(東ヨーロッパ)の人民民主主義革命あるいは政治形態としての人民民主主義だけでなく、アジアのそれをもふくめ、全體として人民民主主義革命および人民民主主義をとりあげ、それぞれの特徴を明らかにしてはいない。このことは「經濟學教科書」の課題とされてはいないのである。

3) たとえば、ポーランド統一労働者黨第2回大會(1954年3月)における同黨中央委員會書記ボレスラフ・ピエルトの演説。(『恒久平和のために人民民主主義のために』紙、1954年3月19日號)。